

Comment Clauses in Early American English Letters: Syntactic Development and Sociolinguistic Variations in the Writings of the Winthrops and Their Contemporaries

公開用論文要約

福永 眞理子

本論文は、17～18 世紀英領アメリカ植民地社会における書簡を用いて *I think* や *I know* など一人称現在形心的認識動詞 (I+V と記す) が **comment clause** へ発達する過程を明らかにすることを目的とする。対象資料は、マサチューセッツ湾岸植民地初代総督ジョン・ウインスロップ (JW; John Winthrop, 1588–1649)を中心とするウインスロップ家及び交信相手の書簡 1,363 通 (原稿・断片を含む約 57 万語) から成る自編コーパス (CWC: Corpus of the Winthrop Family Correspondence) であり、1616-1779 年の約 160 年間を対象に挿入詞の構文パターンと機能を計量的・質的に分析し、その結果を報告する。

本論文は序論・四章の本論・結論・引用文献一覧・付録から成る。序論では研究目的、**comment clause** の定義、理論的背景、統語発達の仮説、資料の意義、方法論、CWC の構成を示す。研究の問いは 3 点である。(i) **Comment clause** は 17～18 世紀にどのように進化したか。(ii) 初期アメリカ英語の用法はイングランド本国 (Old England) の書簡と同じか、また、社会的・文体的要因による変化はみられるか。(iii) 初期アメリカ英語の **comment clause** は現代英語と機能的にどう異なるか。

序論では、**comment clause** の主要な先行研究による仮説を述べる。本論文では機能面の議論には **comment clause** を用いるが、構文発達に焦点を当てる場合には挿入詞あるいは挿入構文という用語を用いる。多くの **comment clause** は初期近代英語期 (c.1500-c.1700) に発達したとされるが、初期アメリカ英語に関する詳細研究はない。CWC には会話に近いとされる **private letters** や様々なタイプの書簡を含み文体比較や語用論研究に適する。CWC は 8 期間に区分し、必要に応じて 4 期間に集約して分析した。さらに、著者グループ (Winthrop 家男性、Dudley 家男性、女性、Old Englander、その他)、書簡タイプ (家族個人宛、非家族個人宛、複数宛先・公的書類) に分類した。

続いて、**comment clause** の発達に関する 2 つの主要仮説を確認する。Thompson and Mulac (1991) は「*I think that* + SENTENCE」→「*I think 0-that* + SENTENCE」→「*I think* (独立用法)」の経路を提示し、**that** を用いない 0-**that** 構文による再分析が自由な位置移動を可能にするとした。他方、Brinton (1996, 2006, 2008, 2017) はこの経路が歴史的資料に常にあてはまるわけではなく、中英語に多く用いられてきた *as/so I think* から *as/so* が脱落して発達する経路を提案する。また、WH 関係詞節内の I+V が構造的類似を通じ発達の橋渡しを担った可能性も指摘する。

続いて、CWC に生起する I+V のうち、先行研究と比較可能な 35 動詞を対象と

し、動詞別頻度を示す。助動詞・副詞が介在する例は除外したが、as/that/which + I think タイプが独立して用いられている用例は対象とした。対象構文 (that 節・0-that 節・挿入構文) とその他の構文の判別基準を示し、挿入位置は Kaltenböck (2007) を参考に細分化した文頭 A(i)~(ii)、文中 B(i)~(viii)、文末 C(i)~(ii) に分類した。

CWC から抽出した I+V の総数は 2,884 例であり、that 節 118、0-that 節 588、挿入構文 1,318、その他 860 であった。このうち、that 節・0-that 節・挿入構文の合計 2,024 例を調査対象とした。CWC における挿入構文の割合は全期間 60%~72% と高く、that 節は常に最小であり、その他の構文は減少傾向であった。標準化頻度は第 IV 期 (1680-1699) にピークを示し、女性の書簡と家族宛書簡に多い。構文選択の比較には、挿入構文の百分率を用いる。

第二章では先行研究に基づき仮説の詳細を整理し、comment clause の発生要因として *pæs þe*・as・that・WH 関係詞などの前方照応的要素に共通性がある点を示す。中英語期には既に Chaucer のテキストに挿入用法が存在し、WH 関係詞節内に生起する例も確認される。また、17 世紀初期までに階級差は消失するものの、ジェンダーやジャンルによる頻度差があったことを述べる。

第三章では、研究の問い(i)の統語変化に取り組む。まず、先行研究との比較考察を行う。15 世紀書簡調査では as 付き挿入用法が多かった動詞も CWC では bare 型が圧倒的に増加した。I deem, I trow, I wene, I wot など 15 世紀で用いられていた表現は CWC では消失し、逆に I believe, I doubt, I hope, I know, I suppose, I think, I trust, I understand は急増した。

次に CWC における挿入構文の比率は、29 動詞中 26 が 50%以上であり、多くが A(ii)位置(等位接続詞後)と B(vi)位置(WH 関係詞節内)に集中した。Matrix clause 仮説が示すような特定の表現 (I think) に 0-that や挿入構文の比率が他の動詞より際立って高いパターンとは異なり、0-that 節と挿入構文は多様な動詞に広がっている。また、that 節の比率は低く、as 付き挿入用法の多くは慣用句であった。14 の高頻度動詞のうち that 節との共起が 15%以上の対象句は I hear, I find, I understand, I perceive に限られる。I wish, I understand 以外は 17 世紀初期 (1616-1659) から挿入構文が優勢である。しかし、位置変化は動詞により異なり、I fear など一部を除けば中間・文末位置が時代とともに増加傾向を示すわけではない。I hope は文頭と文中・文末の割合が拮抗し、I think は増減を繰り返している。文頭・文中・文末の位置比較だけでは発達を十分に示せず、挿入位置詳細分析により、WH 関係詞節内(文中)と等位接続詞後(文頭)の挿入用法が発達に寄与したことが判明した。

第四章は、研究の問い(ii)の社会言語学的変異に取り組む。地域差では、New England の方が挿入構文の割合が高く、WH 関係詞節内に多く用いる傾向がある。一方 Old England は等位接続詞後の文頭位置を好む。ジェンダー差では、女性書き手は語彙レパートリーが少ないが I think をより頻繁に用い、文頭を好む。男性は情報補足のため WH 関係詞節内や名詞・前置詞句の前後に用いる傾向がある。

年齢差では、全グループで **bare** 型が優勢であり、Group 8 (1720 年以降生まれ)を除いた全年齢層での挿入構文比率は 57%~73%を占める。Group 4 (Wait Winthrop を含む 1640-1659 生まれ)に文末の用法が前世代より増加する。

JW の書簡タイプ別比較において家族宛書簡に挿入用法が多く、**comment clause** は親しい関係性の宛先から遠い関係性の宛先へと拡散した可能性を示す。**I believe, I fear, I hear, I hope, I suppose, I think** の挿入構文比率は 50%以上を示し、かつ親しい関係性の宛先で多く用いられる。一方、**I find, I wish** の挿入構文の比率は 50%に至らず遠い関係性の宛先により多い。高頻度動詞の中で **I wish** は **0-that** 構文が主流であり、親しい関係では仮定法形(**subjunctive**)で表される節との共起もみられる。

第五章では、研究の問い(iii)の語用論的機能の同定に取り組む。高頻度 14 動詞および **I see** の語用論機能を動詞別に検討した結果、現代英語の **comment clause**に通じる機能があることが判明した。JW の用法は構文にかかわらず主観的に用いられることが多い。家族宛書簡では文末・文中に多く、**I think, I suppose, I doubt** は確定困難な予定を述べる文脈で用いられ暫定性や推測を表し、**I hear, I perceive** は証拠性を表す。非家族個人宛書簡における **I hope** は願望を強調し、**I know** は確信を表し相互調整機能を示す用例も確認された。

第六章では結論として、CWC では 35 動詞中 29 に挿入用法が確認され、早期から **bare** 型が主流であり、**as** 付き挿入用法や **that** 節構文を比較的好む動詞は限定的であった。挿入用法は暫定性・推測・証拠性・確信といった語用論的機能を持ち、現代英語の **comment clause** 機能に通じる。初期アメリカ英語における **comment clause** の用法は、男性は多様な位置で情報補足に用い、女性は語彙選好により **I think** を文頭に多用した。挿入用法は親しい相手先への書簡から広がり、頻度は 17 世紀後半に増加し、その主な要因は New England 生まれの Group 4 (1640-1659 年生まれ)の書簡であった。位置的には等位接続詞後と WH 関係詞節内が中心となり拡散に寄与した。これらは書簡に限定した結果であり、他の使用域との比較は今後の研究課題としたい。